

# 蘇芳集



金糸雀籠

高橋 さえ子

万愚節

青山

丈

不忍池の風に始まる枯蓮

雛段にまだ載せてあるセロテープ

調律のパイプオルガン冬三日月

水仙の中は大抵行き止まる

白樺の幹の光沢氷解く

揺れてゐる椿見てから帰りけり

加湿器の湯気生き生きと家居かな

啓蟄の靴屋の奥の靴を見る

これよりの一齡重し富士に雪

道端に落ちる椿となつてをり

夜半覚めて春の近づく壺の口

独活食べた日が何時ごろか考へる

籠を出たがる金糸雀や雛祭

東口から西口へ万愚節

春の電話

小川美知子

夏柑をぐいぐい剝いて気弱な日  
沈丁や何かいろいろの精一杯  
落ちてゐる方の椿の赤きかな  
春宵の切手曲がつてをりにけり  
春の電話寂しいと言ひよく笑ふ  
まだ咲かぬことの楽しき梅見かな  
春の川やがて日向を流れけり

二月の灯

木内憲子

立春の角曲るたび人と会ふ  
草芳し踏みてあやふきところにも  
大皿を洗ふ貧しき二月の灯  
累日のいつとは知らず落椿  
息つけば浅春の星あきらかに  
こころざし全うすべし梅真白  
ゼムピンの数を仕舞ひて三月へ

銘菓

小島みつ如

朝な夕な介護車窓に探梅す  
さきがけて咲く産土の梅二本  
療法士ともろにぶつかる春淡し  
水仙の丘染井吉野の初花も  
春一番病院まではあと数歩  
裏庭へ猫も移り来日永かな  
銘菓届く夫の命日あたたかし

薄氷

清水裕子

荒涼の中の一景鴨の陣  
一山の諸鳥のこゑ西行忌  
木に登る猫にも勢ひ恋近し  
盤石に散りし白梅うすみどり  
日没の空のくれなる春愁  
引売のこゑの躰く薄氷  
春落葉ひと色にして暮れにけり

白梅 下平直子

探梅の垣より拝す屋敷神  
駄菓子屋に古着も売られ四温晴  
冬終る家居しづかな雨の音  
白梅の白透きとほる雨上り  
水鳴つて早春の畦耀へり  
母生れし日や白梅の咲き揃ひ  
俎板の鱗きらりと戻り寒

椿と時間 富田正吉

仏の眸椿の中にきつとある  
さまざまな椿の自由時間かな  
体内の水のごとくに椿咲く  
このたびも夢のつづきの椿かな  
風呂敷に包まれてゐる椿の枝  
なつかしき時間の中の椿かな  
時間から剥がされさうな椿かな

帰り来よ 野路斉子

桜咲くとき改めて師の母校  
それぞれに何処か必死なさくら咲く  
定規もて写生の校舎桜どき  
蝶とんでトラックの荷のすべて泥  
帰り来よ森を故郷と発ちし蝶  
校庭の芽吹きに雨の音楽隊  
椽の花咲く高過ぎる遠過ぎる

たなごころ 前田陶代子

余寒なほ池のかたちに日の当たり  
水辺りの風まだ固き黄水仙  
囀に翳してうすきたなごころ  
築山に風鳴る鳥の帰るころ  
風音を遠くにしたる紅椿  
紅椿咲いて真昼を暗くしぬ  
竹林の闇うすうすと猫の恋